

2 明治三陸地震津波(明治29年6月)、昭和三陸地震津波(昭和8年3月)

< 前兆現象－海 域－>

明治 | 三陸沿岸一帯は、3月頃からうなぎの群れが多く見られた。6月には本マグロ、カツオ、いわし等の大群が定置網に殺到し途方もない漁獲量となる。40年前の1856年(安政3年)の地震津波のときも同様にうなぎの発生やいわしの大豊漁があった。地震発生2、3日前には、潮流の乱れにより漁船の航行に支障があった海域もあり、また、水温の急変があったともいわれ、これら海中の異変により魚群が海岸近くに移動したのではないかと推測される。

昭和 | 明治のときと同様に、沿岸各地で大豊漁がみられ、いわしの大群が海岸近くに殺到。例年11月で終わり、以降少なくなるはずの漁獲は、越年後もさらに激増する異例な状況であった。1月頃から続発した地震の影響により、いわしの群れが沿岸に移動したものと推測された。大量のあわびや海藻類が岸に漂着した所もあった。

< 前兆現象－陸 地－>

明治 | 沿岸一帯の漁村では、井戸水が前日あたりから白や赤に変色し、にごりはじめる。当日午後の干潮時、各地でめったにないほどの大干潮となり、井戸水も激減した。

昭和 | 明治のときと同様に、井戸水の減少、濁水や変色・にごりなどが沿岸南部地方に多くみられた。

< 津波発生、襲来時の特異な現象－海上での大轟音と怪火－>

明治 | 突然沖合いから、雷鳴あるいは砲撃のような大音響が発せられ、前後して多くの怪火が海上にみられた。※久慈では長久寺(新井田付近)で激雷のような音響の直後、久慈川沿い一帯(新井田、田屋、川崎町)では急激に浸水し、家屋は見る見るうちに漂流、破壊され、激流の中に消える。

昭和 | 明治のときと同様に、三陸沿岸各地で砲撃音に似た大音響と海上の発光現象(稲妻のようなきらめく光)がみられた。また、津波襲来と同時に強いあおり風が発生した。

< 津波の様相 >

明治 | 飛沫を上げ水の峰となって突進した。

昭和 | 切り立った波が高くそびえ、すさまじい速さで襲来した。

< 襲来直後の様相 >

明治 | 電線、道路が破壊され通信は途絶。海岸域では、家々は跡形もなく消え、破壊された家屋・漁船の破片、津波に運ばれた岩石が散乱。至る所に横たわる多くの死体は、梅雨期の高温多湿により急速に腐敗して死臭が満ち、うじとハエが大量に発生した。

昭和 | 被災時一命を取り留めるも、厳寒の深夜のため凍死する者が多数あった。また、「冬と晴天の日には津波は来ない」という迷信から、避難しなかった人も多く、被害を拡大した。

< 被災後の状況 >

明治 | 食料、衣類、寝具等が著しく不足。被害をまぬがれた者の中には、精神異常になる者や原因不明の病気に倒れる者が続出した。被災地は警察力が失われ、無法地帯と化し盗難が多発。また、津波の恐怖から各地で避難騒動が起き、子供が圧死した事件もあった。

昭和 | 明治のときと同様に、被災地は無法地帯と化す。被災家屋からの盗難、漂流物の横領、物資不足に乗じて暴利を得る商人の横行が各地でみられた。

3 チリ地震津波(昭和35年5月)

遠地津波のため、明治・昭和の大津波のような特殊な現象は見られない。

津波は、直立状の大波が押し寄せる形ではなく、潮が静かに上下し、海面がふくれ上がってゆっくりと襲来した。ただし、陸地に浸水すると急激に流速を増し、河川をさかのぼるときは小さい直立した形で進んだ。各地では防潮堤の整備が進んでおり、また、明治・昭和の大津波が夜間だったのに比べ明け方であったことや、各漁港では出漁準備中でもあり、潮流の異変・引潮から津波襲来を察知し、すみやかな避難広報により人命損失は少なかった。